



棒で、リトル・ジョーのひづめや副蹄をついたり、けられそうになるとさつとひつこめたりして、調教を続けてきた。調教棒がおそろしいものではないとわかると、リトル・ジョーはけるのをやめて、イーライの言うことを聞き始めた。

「少し開きすぎだ、イーライ。もどしなさい」おじいちゃんが言った。「いいか、頭絡は方向を指示するもの。調教棒は動かす足を指示するものだ」

イーライは調教棒の鉤で、リトル・ジョーのかたい副蹄をついた。完璧だ！ イーライはおとなしく言うことを聞く子牛の頭頂を見つめながら、黒いおなかをなでた。これでばっちりだ、とイーライが思った瞬間、リトル・ジョーがいきなり白目を見せて前進し、姿勢を崩した。いったいなにが起こったんだ？ イーライはあたりを見回した。犯人は犬のテイターだ。テイターは、トラクターのわだちにできた水たまりで、暑さをしのぐようとしていた。

「ひどいよ、おじいちゃん。テイターったら、リトル・ジョーをおどかさんだもの！」

テイターは泥水の中をころげ回った。そして、しっぽを振って水をまき散らし、黒い歯茎を見せた。あげくの果てにくしゃみをした。長いあいだ腹を上にしていていせいだ。